

# 近代日本における中国人女子留学生の一考察

— 雑誌『女学世界』を中心に —

楊 妍

東北大学大学院経済学研究科特任助教

## 要 旨

Chinese women who studied abroad in Japan have played an important role in the history of modern Sino-Japanese cultural exchanges. They actively participated in social activities in Japan, and after back to China, conveyed the new women's liberation to China and made a significant contribution to the development of the women's movement in China. It can be said that the cultural influence of the study abroad experience is an important factor that cannot be overlooked in the history of China. However, they did not aim to accept all of “Japan” which became an emerging country soon after the Meiji Restoration. This study is used by “*Women's World*”, a Japanese magazine for women published in January 1901, as the main material, and considers it from the modern perspective. I want to consider how Chinese female overseas students interacted with Japanese at the time, what kind of study abroad life they had, and how the Japanese saw them.

キーワード：明治日本 / 女子留学生 / 『女学世界』 / 女子教育 / 良妻賢母 / 異文化交流 / 受容

## 一. はじめに

近代以降、清朝政府は近代化を遂げた日本に注目し、様々な改革運動を実施した。その一方で、日本の教育界も当時中国の教育機関との教育提携・交流を模索しており、日中双方の教育界の交流は清末以降から活発に行われた。日清戦争後の1898年以来、多くの中国人留学生が来日し、彼らを経由して日本の近代化というモデルが紹介され、中国社会の政治や社会体制を大きく動かし、男性と異なり、中国の女性は長期にわたって封建礼教に束縛され、容易に国外に出ることができなくなったが、極少数の革新的な女性も海を渡って日本に留学し始め、さらに1905年頃から中国人女性の日本留学ブームが出現した。

先行研究では、中国人女性の日本留学に関する史的事実（留学の背景、留学の経緯、女子留学生が参与した社会活動、教育機関と関係者）など研究に重点が置かれることが多くあった。また、中国人女子留学生の個人的な研究については、代表的な人物としての秋瑾、何香凝<sup>かこうぎょう</sup>と胡彬夏<sup>こびんか</sup>を除いては、十分な研究が行われなかったようである。とりわけ、この時期の日本人から見た中国人

女子留学生の様相、そして日本留学の経験が彼女ら自身に如何なる影響を与えたのかに関する研究はいまだに欠落している。

そこで本研究は、1901年1月に刊行された日本の女性向け雑誌である『女学世界』を主要な資料として用いて、近代的な視点から考察することで、日本の留學生活を通じた中国人女性の「東洋文明の受容」と「異文化交流」における思想連鎖の一側面を考察したい。

## 二. 『女学世界』と中国人女性

『女学世界』は博文館より明治34年（1901年）1月に刊行され、終刊は大正14年（1925年）6月である。第1巻第1号から第25巻第6号まで増刊号を加えて総計350冊である。読者は女学生年代を中心とした10代後半から20代の女性層であったと考えられる<sup>1)</sup>。山口昌男によれば、博文館は「明治の最大の文化産業というべき出版企業の雄<sup>2)</sup>」であり、1887年に『日本大家論集』を創刊して以来、多種の雑誌と書籍を出版して成功を取めた出版社であった。博文館では『女学世界』以前に、『日本之女学<sup>3)</sup>』（1887年8月～1889年12月）、『婦女雑誌』（1891年1月～1894年12月）など女性雑誌が出版され、女性を読者として想定した雑誌を発行しており、『女学世界』はこれらの雑誌の後継誌というべき位置にあると小山静子は指摘する<sup>4)</sup>。『太陽』（1895年～1928年）の創刊によって最盛期を迎えた博文館が、比較的短命に終わった刊行物を引き継ぎつつ、発行したのが、この『女学世界』という女性雑誌であった<sup>5)</sup>。

発刊時から16巻13号（1901年～1916年）までの編集長は松原岩五郎であり、17巻から終刊25巻6号（1917年～1925年）までは岡村千秋である。岡村の就任とともに『女学世界』の編集方針に大きな変化がもたらされたという<sup>6)</sup>。同誌の発行部数ははっきりしないが、「七、八万を売って世の驚異とされていた<sup>7)</sup>」、「或時は多くの本館（博文館・筆者注）発行雑誌中首位を占むるほどの大部数を発行していた<sup>8)</sup>」という証言もあり、多くの読者を得られた女性雑誌であったと考えられる。

「発刊の辞」には次のように述べている。「弊館茲に本誌を発刊せむとするは、方今の女子教育の欠ける所を補はむとするの微衷に外ならず。遍く女子教育に経験ある諸大家の寄稿を仰ぎあらゆる女子に必要な事柄を網羅し学を進め、智を開くと共に其徳を清淑にし其情を優美にし家政に通曉せしめ、女子に必要な芸能を自得せしめ、以て賢母良妻たるに資せむと欲す<sup>9)</sup>」。ここで、『女学世界』の趣旨が「智」、「徳」、「芸」を備え、家政をよく理解するという良妻賢母の育成を目指していたことがわかる。

良妻賢母という女性像は、日本が近代化を進める過程において、理想的な女性像として構築されたものであったと言われている<sup>10)</sup>。日本の高等女学校は、「良妻賢母」という女性像の育成を教育理念として掲げることによって整備されていったのであり、『女学世界』もその責任を担っていたのである。一方、このような明治期の女子教育理念は、多くは西洋から日本を経由して中国に輸入され、梁啓超、孫文などの男性知識人らの女性思想の形成に大きな影響を与えた。維新新

派の女子教育論は、「賢母良妻<sup>11)</sup>」として女性を育成するためには、纏足を禁止すると同時に、女子教育を新興させなければならないというものであり、女子教育が将来の国民の資質に直結し、最終的には国家の存亡を決定するとみなす点において、明治期の女子教育論と同様な文脈に立つ<sup>12)</sup>。

『女学世界』全 350 号のうち、中国人女性関係の論説・記事とみなし得るものとしては、48 篇が挙げられる。そのうち、中国人女子留学生に関わる記事は 12 篇がある。これらの記事の執筆者の多くは女性である。明治期という時代において、女性の執筆者や編集者がメディア界で活躍する姿はほぼ見られない<sup>13)</sup>。また、多くの女性雑誌が生活面の情報に力点を置く中で、良妻賢母の育成のための修身道徳的な論説のみならず、様々な方面の知識や教養を広げていこうとする同誌の方向は、総合雑誌に近かったといえる<sup>14)</sup>。

そして、中国人国民性や中国政治関係の論説は、『太陽』、『改造』など他の一般的な総合雑誌でも多く目にする。中国人女性について触れる内容は、『女学世界』の一部の執筆者が中国人女性と直接接したことがあるというところから、より客観的な視点で当時の中国人女子留学生に関する実際の情報と感想を表明できると考えられる（表 1 参照）。

表 1. 『女学世界』中国人女性関係記事（太字は中国人女子留学生関連）

執筆者名	タイトル	巻号	発行年月
奥村五百子	清韓遊歴所見	第 1 巻第 4 号	1901年 3 月
西澤公雄	支那の婦女子	第 1 巻第14号	1901年10月
西澤公雄	支那の婚礼	第 2 巻第 8 号	1902年 6 月
稲葉君山	満洲人の婚礼	第 2 巻第14号	1902年11月
未署名	支那の風俗	第 2 巻第16号	1902年12月
未署名	<b>支那婦人寄宿舎生活</b>	第 3 巻第 9 号	1903年 7 月
未署名	支那の衣食住	第 3 巻第12号	1903年 9 月
ヘレンクラーク作 長谷川天溪訳	支那の少女		
菅原雅輔	支那の婚礼	第 3 巻第16号	1903年12月
長谷川四迷	黒龍江畔の勇婦	第 4 巻第 1 号	1904年 1 月
中村玲子	<b>支那留学婦人の生活</b>	定期増刊	1904年 3 月
田村松魚	支那婦人小話	第 4 巻第 7 号	1904年 6 月
西澤好子	支那婦人の習俗（上）	第 4 巻第 9 号	1904年 7 月
	支那婦人の習俗（下）	第 4 巻第10号	1904年 8 月
記者	<b>東京に於ける清国女学生</b>	第 4 巻第14号	1904年11月
未署名	支那人の生活	第 5 巻第10号	1905年 7 月
千島益雄	戦地慰問の記	第 5 巻第12号	1905年 9 月
成田篤	馬蹄の塵	第 5 巻第13号	1905年10月
下田歌子女史	<b>支那婦人の社交</b>	第 5 巻第14号	1905年11月
友金豊之助	<b>凱旋土産</b>	第 5 巻第15号	1905年11月

竹川澄子	四川省の風俗	第5巻第16号	1905年12月
下田歌子女史	支那婦人の社交	第5巻第14号	1905年11月
土方久元	支那漫遊談	第6巻第1号	1906年1月
婦人記者	清藤女史の支那婦人談	第6巻第3号	1906年2月
河原女史	蒙古生活談	第6巻第4号	1906年3月
未署名	支那人の女子読本		
未署名	清国婦人の風俗	第6巻第16号	1906年12月
盃簪子	清俗深閨婦人	第7巻第2号	1907年1月
黄鸝子	世界各国婦人談話會	第7巻第6号	1907年4月
諏訪東城	世界各国婦人の好尚		
服部博士夫人 <sup>15)</sup>	進歩しつつある北京の貴婦人	第9巻第4号	1909年3月
吉野作造	余が観たる清国婦人	第9巻第6号	1909年5月
河岡潮風	実践女学校	第9巻第8号	1909年6月
西尾きやう子	産婦の為に大切と思ふ事柄	第9巻第11号	1909年9月
藻集陽子	支那で見た事聞いた事	第12巻第2号	1912年1月
清藤秋子	中華民国の婦人	第12巻第5号	1912年3月
服部繁子	支那婦人の特質	第12巻第7号	1912年4月
未署名	支那衣食住奇聞	第12巻第11号	1912年7月
鶴沼梶子	満洲の官舎に生活する様々な奥様	第13巻第2号	1913年1月
茅原華山	各国婦人の特色	第13巻第13号	1913年8月
嘉祥纏	支那の人情奇談	第13巻第15号	1913年11月
楊州府士	支那の人情美譚	第14巻第1号	1914年1月
鷗尾宮	支那の古代史に顕はれた賢婦逸話	第14巻第2号	1914年2月
犀牛堂	支那美人の奇しき伝説	第14巻第3号	1914年3月
吉野作造	支那見聞談	第15巻第6号	1915年7月
久保扶佐子	支那婦人の産蔭記事	第16巻第3号	1916年4月
結城美津子	支那婚礼 お嫁さんの荷物	第17巻第2号	1917年3月

### 三. 中国女子教育と日本留学

日本では明治5年（1872年）に学校教育制度が作られ、学齢に達すれば男女問わず就学することが定められ、1900年には女兒の就学率が70%を超えた。また、1899年には「高等女学校令」が出されて、女子の中等教育もかなり普及した。一方、中国では女子学校教育が正式に認められたのは1907年のことである<sup>16)</sup>。したがって、それまで新しい教育を求める中国女性らは外国へ留学するという選択肢しか持たなかったのである。

日本では、下田歌子（1854年～1936年）が1905年、実践女学校附属女子留学生師範工芸速成科を設けて多くの女子留学生を受け入れた<sup>17)</sup>。下田は中国人女子留学生に接した感想として、極めて聡明で実際に長けており、まるでアメリカ人女性のように進取の気性を持ち、日本女性のひたすら温順なのとは違くと高く評価している<sup>18)</sup>。先行研究では下田が教育目標としていた「良妻賢母」の内実を提起した。それが欧州で目にした女性のように、上質な労働力として国家に寄与

できると同時に、精神的には押しかけてくる西洋文明に対抗できるように、「東洋女徳の美」を守り抜く女性を意味していたのである。そして、西洋文明に対抗するという連帯感は、日本の女性にもかかわらず、東アジア全体の女性を対象にするという下田歌子の教育理念に発展したものである<sup>19)</sup>。

また、1902年の『大陸』という総合雑誌には「中国女学生留学于日本者之声価」という記事によれば、「中国の女子数人、航海して日本に来るあり、日本教育大家、華族女学校学官監下田歌子先生監督の下にありて業を習ふ（中略）これらの留学生は、举止閑雅、志趣高尚、日本人に対しても亦た懼憚せず、彬々として礼あり、遥かに日本婦人の能く及ぶ所にあらず<sup>20)</sup>」と女子留学生の受入れに対して日本人は基本的に歓迎の態度を示したことが読み取れた。

『女学世界』に中国人女性に関する記事が最も多かったのは1906年前後であり、中国人女子留学生の積極的な受け入れが始まった時期である。多くの女子留学生は日本で知識を吸収するだけでなく、女性解放運動にも熱心に取り組んでいた<sup>21)</sup>。前文に引用した下田歌子が創立した実践女学校は、清末女子留学生を受け入れた代表的な教育機関である。実践女学校は、1899年5月7日に東京市麹町区元園町二丁目四番地に開校した。

これらの女子留学生は、主として知的で富裕な上層階級の出身者からなっていた<sup>22)</sup>。受け入れ側の学校にとって、留学生は学校の「財源」ということであった。『女学世界』には「金がないのが玉に瑕。経綸胸に溢れても、手を空しうして立ん坊をせねばならぬ場合が少くない。此時にあたり一個の好財源となりしものは清国留学生の教育と云う事だ<sup>23)</sup>」と記される。また、「隣邦を啓発<sup>24)</sup>」するという理由も同誌に指摘された。

一部の日本人は、日本に到着したばかりの中国人女子留学生に対して「举止閑雅」、「志趣高尚」と高く評価した。しかし、下田歌子が主宰した実践女学校の教育目的は、「本邦固有の女徳を啓発し、日進の学理を応用し、勉めて現今の社会に適應すべき実学を教授し、良妻賢母を養成する所とす<sup>25)</sup>」と、「西洋文明」に対抗できる良妻賢母という理想的な女性像を高らかに掲げ、明治日本の女子教育を方向付けていくのである。これが必死に救国の方法を探究しようとする中国人女子留学生との間には、必ず大きな食い違いが現れたと思われる。

ここで、実践女学校と同じく「賢母良妻たるに資せむと欲す」と唱えた明治期の『女学世界』に注目し、中国人女子留学生を包含していた中国人女性に関わる記事に焦点を当て、彼女の様相をどのように記述されていたかを可視化させる。次の節では、日本留学生生活を通してこれらの中国女性の中にどのような変化をもたらしたのかを明らかにしたい。

#### 四. 外見の日本化

中国女性が母教の基本を養成するための知識を学ぶことが清朝政府から見れば極めて重要なことである<sup>26)</sup>。当時、自費で日本へ留学した女子学生は、所在の地方官より提学司衙門<sup>がもん</sup><sup>27)</sup>に送り、選抜を受ける必要があった。その条件は必ず中国国内で教育を受け、文章をきちんと書け、賢く

て淑やかなことであった。

清末女子留學生が来日した当初の情況について、『女学世界』に以下のような記載がある。

尤も三十四年頃から清国人の三人五人はゐたのだが、留學生と名のついて、束になつて渡つたのは三十八年夏、湖南地方よりの二十名を以つて始めとするのである。最年長者四十九歳、最年少者十四歳。真に鳥合の衆であつたが、新智識を求めんと欲する心は皆な一ツ。とても――新日本婦人と威張る一部の女學生徒の比でなかつたさうな<sup>28)</sup>。

留學生部を置いたのは三十九年で、前年の入學生は早や卒業して錦を着て帰国し、学校の先生になつたとやら。僅に一年でよほど学力がついたと認められたものと見えて、其後は官費留學生もやつて来る。今では寄宿生だけでも三十幾名となり、主任の坂寄美都子女子大喜びだ<sup>29)</sup>。

実践女学校は中国からの女子留學生を受け入れるため、1902年に特別の清国女子速成科という1年制の課程を設置し、学校内にも清国留學生部を開設した<sup>30)</sup>。

さて此留學女生徒は日々如何なるとを学びつゝあるか風俗生活の全然別様なる我国へ来り寄宿生活の様子は如何に恐らくは未だ多く世に知られざるべきを以て同塾舎監に就き聞き得たる所を左に紹介せんとす<sup>31)</sup>。

爾來僅に五六箇月の浅い月日ではありますが既に日常の会話には殆ど困らぬ程になり、自分から話す力は未だ充分とは参りませんが聞く方は好く了解し得られますから此工合で進歩致したならば一年の後には大分役に立つてあらうと存じます<sup>32)</sup>。

以上の引用文から、明治期の日本留學ということ、中国人女性にとっては決して容易なことではなかつたことを窺える。日本人の学校関係者とのコミュニケーションを取るために使う日本語はもちろん、基本的な生活習慣、例えば衣・食・住においては、中国での生活と異なる部分が多くあつたことが以下の文章から見られる（下線部は筆者による）。

さて寄宿舎生活の状態を摘んで御話致しますれば何分風俗習慣は違ひ殊に是れまで少しも世間を知らぬ妙齡の人達が急に他国人の中に這入つたのですから嘸や不自由の事と思ひ遣られますが之を取扱ふ方も亦なかなか困難を感じました種々の故障を排斥して兎も角も最初から一般寄宿生同様の規則を守ることにしました（中略）是れは特別にテーブルと椅子を用ひさせ食物も和洋折衷の処に致して居ります但し自修時間とか睡眠時間とか外出時間とかは無論



一般の規則通りに致し又衣服、髪のかつ方などは他の生徒と同じに総て日本の風に倣はせて居ります、即ち髪は毎朝独で梳いて束髪に結びそれで袴を着けて居るのですから一見少しも日本の女子と変りませぬ<sup>33)</sup>。

女子留学生に寄宿生として寄宿舎の規則を守らせる同時に、関係者らは中国の習慣と日本のそれとを合わせて考慮し、女子留学生に日本の環境に慣れさせるために、色々工夫したが、女子留学生の服装や外見などの面において、日本の習慣を守らせるようになった。下記の図1は1907年の北京北洋女子師範学校に勉学していた女学生の写真である。彼女らは当時の中国女学生式の服装を着用することがわかった。しかし、図2の写真の通り、日本留学中の殆どの中国人女子留学生が、日本人女学生と同じく、袴に束髪というような格好をしていたのである。また、普段授業中だけではなく、外出時であっても、日本服と袴の着用が義務付けられている<sup>34)</sup>。このように、中国人女子留学生の外見の面では、比較的「日本の女子と変りませぬ」と日本化していた様相が呈している。



図1. 清國の女學生（初出：『女学世界』第7巻第10号・1907年7月）



図2. 支那の女医学生（初出：『女学世界』第9巻第9号・1909年7月）

そして、当時の中国では女性には教育の機会がなかったにもかかわらず、彼女らを心身共に束縛する纏足という根強い習慣があった。纏足は足の成長を止めることにより、女性の自由な活動を押しさえ、精神的にも男性に従属させるものであった<sup>35)</sup>。日本に来た中国人女子留学生の多くは纏足をしていたが、纏足が運動と生活にもたらした不利な条件を克服するために努力し、積極的な姿勢で中国人女性の精神風貌を展示した。それについて『女学世界』には以下のような記述がある。

日本で考へると支那人のことであるから、十五六歳にもなつたら、頗る様子ぶつて運動などもしないかと思はれるが、決してそうでない、尤も男の見て居る所では、此年頃の女は非常に謹慎である。其代り女ばかりの所では（中略）随分活潑な運動をする<sup>36)</sup>。

帰国後、彼女らは男性が主導した「纏足禁止令<sup>37)</sup>」にただ従ったわけではない。女性自らの自覚により纏足反対を唱えるに至った<sup>38)</sup>。当時袁世凱の家庭顧問として中国に滞在していた吉野作造（1878年～1933年）は、中国女性の纏足廃止運動について以下のように述べる。

支那婦人といふと直ぐ纏足を思ひ出すが（中略）近頃では此の弊害を目覚して天足会といふのを設け、各地に夫々勢力を張つて、大いに纏足廃止を奨励する様になつて来て居る<sup>39)</sup>。

そこで、恐らく中国人女子留学生は日本で日本人女性との触れ合うことを通し、「健康」な足への願いを自然に生じたものと思われる。このような意識が生まれる背景として、日本での生活経験



や、「体操<sup>40)</sup>」などの科目を通して得た身体の健全な発達の重要性の認識は無視できない。

当時、日本の開明ぶりに接した中国人女子留学生らの革命運動は次第に活発化し、女子留学生の間にも次第に言及された<sup>41)</sup>。日本に来て直ちに外見を日本化した女子留学生がいた一方、学校側による「干渉が甚だしい」、「やり難い」と感じた留学生もいたことが窺える。このような留学生がいたのは、日本の文化習慣はまだ慣れていなかったこともその原因の一つとなるが、精神の面でも外部から影響を与えられて変化が起きた可能性もあると考え、その考察を次の節に譲りたい。

## 五. 精神の西洋化

1905年から女子留学生の人数は次第に増え、1907年から連続して4年間、女子留学生の数は毎年100人数を超えた。先進的な男性知識人である梁啓超の「強国保種」(国家を強くして種族を保つ)や、下田歌子の「賢母良妻」の女子教育理論と異なり、当時の日本で留学していた中国女性は、女権を主張して女性の独立した人格を獲得するという女性解放のスローガンを提起した上に、参政権の取得も目指していた<sup>42)</sup>。

当初、日本社会は中国人女子留学生の受け入れを歓迎していた。しかし、日露戦争の勝利を経て、朝鮮半島や中国東北地方に対する日本の侵略的態度は露骨になり、これに伴って日本社会の中国に対する侮蔑的な感情が高まった。さらに、当時の日本人が度重なる女子留学生組織の騒動から中国人女性に対する評価は低くなり始めた。女子留学生は中国国民として母国での教育を受けることができない、単に「教育の不充分<sup>43)</sup>」「先天的無神経<sup>44)</sup>」の女性であるという厳しい眼差しを向けられた。

このように、救国と国民意識の覚醒を探求しようとする中国人女子留学生らが、「良妻賢母」を女性教育の基本理念として認識した日本人らとの間に齟齬があったに違いないと思われる。

中国人女性の覚醒を促進するために提唱された女権という概念は、はじめ西洋から伝入されて中国社会に伝わった。金一(金天翮)という男性知識人<sup>きんてんかく</sup>は「暗闇」に陥っている中国人女性のために、自由解放の鐘を打ち鳴らそうとして『女界鐘』を出版した<sup>45)</sup>。当時、実践女学校に留学していた女子留学生の秋瑾は、中国人女性の置かれた状況に気づき、自立する道を求めるために日本で留学生活を送りながら、女性解放運動や革命活動に尽力した。ところで、彼女の活動に対して、『女学世界』には以下のような評価が見られる。

支那の婦人が一般に気づよい事は實に驚くばかりで御座います。気強いを通り越して、突飛な人も、尠くありません。南方の支那婦人に至つては、更にひどい傾きがあります。かの革命党人に入って斬首されました秋瑾女史の如き婦人はなか、少なからぬやうに見受けるので御座います。恚ういふ風ですから女学校などのやり難いことは一通りではありません<sup>46)</sup>。

秋瑾は留学生の反対集会に参加するため、十七人の女子留学生と共に退学を覚悟で一時校内を去ったのである。帰国した後、革命党员である徐錫麟と連合して武装蜂起の計画を立てた。1907年5月、蜂起の失敗と共に秋瑾は逮捕されて7月に処刑された<sup>47)</sup>。

秋瑾の革命活動の他に、東京で結成された「日本留学生共愛会」（1903年）、「中国留日女学生会」（1906年）、「女子復権会」（1907年）、「留日女学会」（1911年）といった女子留学生の組織会があり<sup>48)</sup>、東京で発行された刊行物は『中国新女界雑誌』（1907年）、『二十世紀之中国女子』（1907年）など7種を数えた<sup>49)</sup>。しかしそれらの動向は、『女学世界』では殆ど紹介されなかった。

先行研究によれば、当時中国人女子留学生が創刊した雑誌の中で、最も影響力を持っていたのは、上述の『中国新女界雑誌<sup>50)</sup>』である<sup>51)</sup>。編集長は女子留学生の燕斌<sup>52)</sup>で、彼女は「女子国民<sup>53)</sup>」即ち「女性の国民意識」の確立を積極的に呼び掛けていた。

しかし、中国人女性の在日活動に対する無理解やからかいを含む日本人の評価も見られる。

清国婦人と来てば、教育もなければ、自重心もなく、女らしい優美もなく、只尊大に構へて、空威張りに威張る斗りなので、同じ女尊でも、西洋の女尊とは、余程趣きを異にして居る<sup>54)</sup>。

近代化に成功し、列強の侵略から国を守ることができた日本とは異なり、同時代の中国は民族的危機に陥っていた。当時に既に国民意識を生じた中国人女性らは、侵略された中国の現状に刺激され、実際の活動に出ることを望んでいたであろう。それは一部の日本人から中国人女性の「女らしくない」という姿勢に対する強く批判したことが読み取れる。

また、『中国新女界雑誌』には、中国人女性の奮起を促すために、欧米諸国の女性運動解放家の立身伝や女子教育状況、世界各国における女性の地位などに関する著作が数多く翻訳されて掲載された<sup>55)</sup>。朴雪梅によれば、『中国新女界雑誌』にみられる在日女子留学生らが求めた理想的な女性像は、日本人女性ではなく、職業を得ることによって自身の独立を実現し、男性と同等に社会に出て、直接国家に貢献できる女性即ち女性解放の先頭に立って活躍する一部の欧米女性であった<sup>56)</sup>。日本の著作に寄らず、欧米女性の教育情況の翻訳を通して、中国女性の近代的自我意識の必要なことを強調している。

しかし、『女学世界』では、中国人女子留学生の革命運動について直接言及した記事はあまり見当たらない。雑誌の編集者及び読者がそれに関わる内容に関心を持たなかった一方、民族危機と深く関係している中国人女性の思想が『女学世界』の「智を開くと共に其徳を清淑にし其情を優美にし家政に通曉せしめ」という創刊趣旨と相容れなかったためではないかと思われる。

中国人女子留学生は明治日本の女性教育を受けたが、家庭内での奉仕を通じて国家に貢献する下田歌子が提唱した「良妻賢母」という理想的な女性像には満足できなかった。『女学世界』の執筆者らはその点を言及せず、中国人女子留学生の「奮起」の精神を中国人女性の「長所」として読者に紹介した記事もあった。

一昨年留学生監督と共に来りし胡彬と云ふ十五歳の小嬢が初めて此校の教場を巡覧した時、毫も憶する色なく黒板の前に進み其渡来せし目的と今後の希望、及び日本諸姉に対する初対面の挨拶をすら――と記載したので、一同其沈着慧敏の態度に感服したとの事です<sup>57)</sup>。

又一般の性質を申すと總て良い方です支那婦人が悉く爾うであるか何うかは別として唯今此処に来て居ります者は日本の婦人に比べて確かに勇健な意志と大胆な氣象とは富んで居るやうに思はれます(中略)我國の婦人の弱点は兎角物に臆すると云ふことで人の面前では口も利けなくなるのが先づ普通ですが未開と云はる、支那の婦人は確かに我に勝る素質を備へて居ることを見て転た自省の念に堪へませんでした<sup>58)</sup>。

下田歌子は欧州で女子教育を視察し、女性の自立の重要性を知ることができた<sup>59)</sup>。中国の女性解放運動と下田の女子教育は、立場の違いにあったにせよ、女性の「自立」という共通の精神基盤に立脚していたことが考えられる。下田歌子、服部繁子など一部の中国人女子留学生を指導していた日本人女性教習にとっては、下田らの志向は東洋の「温順の婦徳」に西洋の「女権」を加えようというものである。「西洋文明」に対抗できる勇健な中国人女性の様子を見て、女性の「自立」という権利を獲得しようとするのは、その主導的役割を十分に果たした日本人女性ではなかったと下田らが想定したと思われる。しかし、中国人女子留学生の「大胆」、「勇健」と関連するでもあるが、日本での組織活動、雑誌発行及び反封建主義の革命運動の詳細について『女学世界』で記事としてまったく紹介されなかった。

一方、『中国新女界雑誌』に掲載された煉石の「留日見聞瑣聞」という記事には、日本の女子教育の発展は著しいが、家庭内では「服従主義」の程度が甚だしい<sup>60)</sup>と述べられた。煉石はその原因は主に二つがあると分析した。第一に、明治維新で功績を挙げたのは殆ど男性で、女性はこれに関われなかった。そのため社会で勢力を占めることができず、男性による女性の権利の制約する可能にしたと指摘する。第二に、教育は普及したのが物質的文明を重視し、精神教育が行わなかった点を挙げる<sup>61)</sup>。そのため、「上等の賢母良妻」を育成する結果となったとまとめる。

日本での中国人女子留学生の状況を見て、彼女らに進歩的な女性解放思想と精神的な支持を提供したのは西洋であった。文末で煉石は、女子留学生らは日本での生活を通じて日本の優れた習俗を取り入れつつ、精神面の教育は断然欧米を師とすべきであると提唱した。最も影響力がある『中国新女界雑誌』に掲載された編集長としての煉石の言葉は、恐らく大部分の中国人女子留学生の心境と重なるものであり、彼女らの行動を先導するものであったと推測できる。

## 六. 終わりに

明治期以来、多くの中国人女子留学生が来日し、彼女らを経由して日本の近代化というモデルが中国に紹介され、中国の社会体制に多大な刺激と影響を与えた。一方、彼女らを中心に中国の

女性解放運動も活発化し、ほかの新思想と同様に、男女同権、天賦人權といった女性解放思想が中国に移入されたのも日本からであった。こうしたことすべては、近代日本と中国の女性関係問題との間に切っても切れない繋がりがあることと見えよう。

本論文では『女学世界』を中心に、中国人女子留学生によって出版された『中国新女界雑誌』にも目を配りながら、明治期の日本における中国人女子留学生に関する記事を探し、その内容を整理してきた。

『女学世界』が伝えるところによれば、明治期の日本留学は、多くの中国人女性にとっては慣れないものであり、彼女らを受け入れた女子学校の教員らは中国の風俗と日本の生活習慣を合わせて考慮し、寝室の配置から、食べ物も中国人の習慣を重んじていた。外見の面では、中国人女子留学生に日本の女学校規則も守らせつつ、日中両国の違いを認めながら出来るだけ「日本人女子と変わらぬ」外見をさせ、外見の日本化により少しでも日本人女性との差異を減少しようという姿勢が『女学世界』から読み取れた。そして、彼女らは日本での留学生活を通し、「健康」な足への希望を自然に産生したものと思われる。纏足した足をものともせず熱心に運動に取り組む女子留学生の姿を見て、日本人の中国人女性のイメージには変化が起り、改めて中国人女性の精神風貌を見直すようになった可能性を示した。

そして、中国女性の精神の面においては、活発な言動に対して当時一部の日本人から不満が示されたが、下田歌子など一部の日本人教師にとっては、中国人女子留学生は日本人女性より国民意識が高いことに関心を示し、称賛の辞を述べている。しかし、一方で中国人女性の言論や革命活動に下田らがまったく関心を持たなかったことも事実である。また、在日中国人女子留学生によって出版された雑誌から、彼女らが求める理想的な女性像は決して当時の日本政府から推奨された「良妻賢母」ではなく、直接的に国家に貢献できる自立した一部の西洋女性をモデルとすることが明らかとなった。このような言論は大部分の中国人女子留学生の共感を得てその精神と言動を先導したと思われる。

本論では、『女学世界』という明治期に出版された女性雑誌を考察したが、同時期の女性雑誌との比較検討を行うことはできなかった。特に『婦人画報』の検討は重要な課題だと考えられる。これらについての検討と考察は他稿を期したいと思う。

## 注

- 1) 加藤節子、「雑誌『女学世界』にみる女子体育」、『上智大学体育』、上智大学体育学会、1986年、42頁。
- 2) 山口昌男、「明治出版界の光と闇—博文館の興亡」、『「敗者」の精神史』、岩波書店、1995年、240頁。
- 3) 正確には、『日本之女学』の発行元は日本女学社となっているが、「博文館内で発行せしも、日本女学者発行とした」ものであるという。坪谷善四郎、『博文館五十年史』、博文館、1937

年、19頁.

- 4) 小山静子、『女学世界』【明治期復刻版】解題、柏書房株式会社、2005年12月、1頁.
- 5) 同注4、小山、2頁.
- 6) 同注4、小山、8～9頁. 小山は三つの大きな変化を指摘する。一つには、小説が次第に多くの誌面を占めるようになっていたことである。二つには、1917年から、女学生を中心とした、より若い層を読者として意識した誌面作りが進められたことである。三つには、職業女性についての情報を提供する記事が増加したということである。その変化が起きた理由として小山は、第一次世界大戦以降の女性をめぐる社会的状況の変化を挙げる。
- 7) 小川菊松、『日本出版界のあゆみ』、誠文堂新光社、1962年、69～71頁.
- 8) 同注3、坪谷、146頁.
- 9) 「発刊の辞」、『女学世界』第1巻第1号、1901年1月、1頁.
- 10) 陳姪媛、『東アジアの良妻賢母論—創られた伝統』、勁草書房、2006年、86頁.
- 11) 中国語では「良妻賢母」とは言わず、「賢妻良母」という。
- 12) 同注10、陳、86頁.
- 13) 神谷昌史、「雑誌『女性改造』とその中国認識」、『滋賀文教短期大学紀要』(17)、滋賀文教短期大学、2015年3月、39頁.
- 14) 石渡尊子、「雑誌『女学世界』に見る女性たちのキャリアデザイン—明治後期を中心として」、『桜美林論考. 心理・教育学研究』(2)、桜美林大学、2011年3月、25頁.
- 15) 「服部博士夫人」は服部宇之吉の夫人である服部繁子のことを指すことである。
- 16) 末次玲子、『二〇世紀中国人女性史』、青木書店、2009年、20頁.
- 17) 最初の中国人女子留学生は、両親を亡くして教会のアメリカ医師夫婦に引き取られた金雅妹と言われている。1869年、夫婦に伴われてアメリカへ行き幼児教育を受け、その後夫婦とともに日本へも来て学校生活を送っている。1881年に再びアメリカへ行き、大学で医学を学んだ。
- 18) 下田歌子、「述教育中国婦女事」、『順天時報』1907年1月12日.
- 19) 同注10、陳、92～93頁.
- 20) 「中国女学生留学于日本者之声価」、『大陸』第1号、1902年、5頁.
- 21) 夏曉虹著・清水賢一郎・星野幸代訳、『纏足をほどいた女たち』、朝日新聞社、1998年、85頁.
- 22) 上沼八郎、「下田歌子と中国女子留学生—実践女学校「中国留学生部」を中心に」、『実践女子大学文学部』第25集、1983年3月、70頁.
- 23) 河岡潮風、「実践女学校」、『女学世界』第9巻第8号、1909年6月、72頁.
- 24) 同注23、河岡、73頁.
- 25) 阿部洋、『中国の近代教育と明治日本』、福村出版、1990年、45頁.
- 26) 中国女性史研究会編、『史料にみる歩み—中国人女性の一〇〇年』、青木書店、2004年、25頁.
- 27) 地方の学政を管理する部門を指すことである。



- 28) 同注 23、河岡、72 頁.
- 29) 同注 23、河岡、72 頁.
- 30) 馬小力、「もう一人の清末の女子日本留学生：崔可言の日本留学とその後の軌跡」、『日本語文化研究：城西国際大学大学院紀要』（4）、城西国際大学大学院、2015 年 10 月、157 頁.
- 31) 記者、「支那婦人寄宿舎生活」、『女学世界』第 3 卷第 9 号、1903 年 7 月、73 頁.
- 32) 同注 31、記者、74 頁.
- 33) 同注 31、記者、74 頁.
- 34) 『読売新聞』1906 年 7 月 20 日付き「実践女学校卒業生」という記事には、「入校以降は寄宿舎の修養教場の受業何くれとなく端正なる体度を保つことの至れる」という記述がある.
- 35) 岩沢正子、「清国女子留学生教育と実践女学校—留学生教育を担当した坂寄美都子の講演会記録を参考に」、『Mathesis Universalis』第 1 卷第 3 号、獨協大学外国語学部言語文化学科、2001 年 12 月、96 頁.
- 36) 池田秋旻、「支那家庭事情」、『女学世界』第 5 卷第 10 号、1905 年 7 月、110 頁.
- 37) 清朝に入ると、纏足に対し禁止令は何回も降りた。多くの知識人も民国に入るまで絶え間なく纏足を反対した。
- 38) 巖安生、『日本留学精神史—近代中国知識人の軌跡』、岩波書店、1991 年、74 頁.
- 39) 吉野作造、「余が観たる清国婦人」、『女学世界』第 9 卷第 6 号、1909 年 5 月、31 頁.
- 40) 「清国女子速成科規定」、「二. 清国女生二授クル学科修身、読書、会話、作文、算術、地理、歴史、理科、図画、唱歌、体操トシ、志望ニヨリテハ別ニ本校手芸科中ノ一二ヲ授クルコトアルベシ」、実践女子学園八十年史編纂委員会、『実践女子学園八十年史』、実践女子学園、1981 年、104 頁.
- 41) 同注 40、実践女子学園八十年史編纂委員会、107 頁.
- 42) 同注 26、中国女性史研究会編、27 頁.
- 43) 西澤好子、「支那婦人の習俗」、『女学世界』第 4 卷第 9 号、1904 年 7 月、165 頁.
- 44) 同注 43、西澤、168 頁.
- 45) 同注 26、中国女性史研究会編、32 頁.
- 46) 服部博士夫人談、「進歩しつゝある北京の貴婦人」、『女学世界』第 9 卷第 4 号、1909 年 3 月、108 頁.
- 47) 崔淑芬、「秋瑾と日本」、『人間文化研究所年報』第 23 号、築紫女学園大学・短期大学部、2012 年 11 月、173 頁.
- 48) 石川洋子、「辛亥革命期の留日女子学生」、『史論』（36）、東京女子大学学会史学研究室、1983 年、43 頁.
- 49) 同注 48、石川、45 頁.
- 50) 1907 年 2 月 5 日に『中国新女界雑誌』は「女性救国、両性の平等」を主張して東京で創刊さ

れた。同誌は中国同盟会河南支部が主催して第6期まで出版され、全ての記事は日本留学中の中国人女性が投稿した文章であった。第3期までの同誌の目次は図画、論著、演説、伝記、家庭、教育界、女芸界、通俗科学、衛生顧問、文芸、小説に変わり、欧米と日本からの翻訳記事が大幅に増加している。販売に関しては、日本では主に東京を中心として販売代理店を設置された。一方、中国では上海、天津、北京、武昌、南京、煙台、蘇州などの都市をはじめ、江西省、広東省、雲南省などの各省まで販売範囲が展開した。朴雪梅、「在日中国人女子留学生の理想的女性像——『中国新女界雑誌』の翻訳記事を中心に」、『日本研究』第56巻、2017年、123頁。

- 51) 周一川、『中国人女性の日本留学史研究』、株式会社国書刊行会、2000年、56頁。
- 52) 燕斌は河南省の出身であり、1905年来日し、早稲田同仁病院で医学を専攻し、1868年に生まれたと推測できる。張淑婷、「『中国新女界雑誌』に見られる日本の事象」、『東アジア文化交渉研究』第11巻、関西大学大学院東アジア文化研究科、2018年3月、86頁。
- 53) 原文「本社最崇拜的就是女子國民這四個大字」、煉石（燕斌）、「本報對於女子國民捐之演説」、『中国新女界雑誌』第1期、1907年2月、14頁。
- 54) 友金豊之助、「凱旋土産」、『女学世界』第5巻第15号、1905年11月、144頁。
- 55) 同注50、朴、122頁。
- 56) 同注50、朴、140頁。
- 57) 中村鈴子、「実践女学校寄宿舎 支那留学婦人の生活」、『女学世界』増刊、1904年3月、16頁。
- 58) 同注31、記者、76頁。
- 59) 下田歌子が1893年から1895年まで2年間にわたって、イギリスなどヨーロッパ諸国の王室教育について学ぶために赴いた欧州視察であった。
- 60) 煉石、「留日見聞瑣聞」、『中国新女界雑誌』第2号、1907年3月、131頁。
- 61) 同注60、煉石、132頁。

## 参考文献

1. 坪谷善四郎（1937）『博文館五十年史』博文館
2. 小川菊松（1962）『日本出版界のあゆみ』誠文堂新光社
3. 阿部洋（1990）『中国の近代教育と明治日本』福村出版
4. 巖安生（1991）『日本留学精神史——近代中国知識人の軌跡』岩波書店
5. 中国女性史研究会編（2004）『史料にみる歩み——中国人女性の一〇〇年』青木書店
6. 陳姪媛（2006）『東アジアの良妻賢母論——創られた伝統』勁草書房
7. 末次玲子（2009）『二〇世紀中国人女性史』青木書店

[附記] 本研究は2021年度笹川科学研究助成（2021-1011）の助成をうけたものである。